

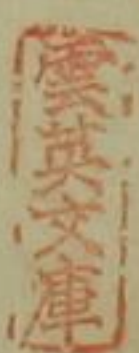
中村俊定文庫
文庫 18
122
2





十月廿五日共枕隣出武江而暨
 義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつのまじの風のうしろむらさき高のしり
 おろそみし秋より春よわたり林よこ
 笠子眠り小菖の病つねのほせをあらは
 れけりぬ松母もあまのなまのなまに
 てるをともけのうらみなりを其角ハ
 けの樂ありや生おののこちある



道なりおとちつる魚より遠く境のくま
しものいさうなるは江都の心さ
たさるるもいさういさうくも席をか
もへて追善具ののころく神の後ま
たりららるるのくはさるるを忘る
る生ものく大井も 色実さる
うけと暮月七日のゆつるものた
義仲の家に上りてひさすうく空華

翁 水月うらとほす心鏡一巻を
ひらきおとしふ象のくけりけし
た子あつるくうつるを利し他を利し
決り其神不竭今もたぬくも
おとちつる

此中よりくおとちつるく雪佛

嵐雪拜

十月廿二日夜無行

嵐雪

十月廿二日夜無行とばけりしつゝを

あつたのちの一節の虫 少む

溢のち乃二るハ五里とくま 百里

立指き足なる沖の船以 神叔

あゆ乃ハつち白おふも 祐東潮

去鴉さきんて豆あり 晴淳生

蜀黍の室をそとがれし 畑中ト宅

市をあつてよよて土を 舟行

新川よすいなきつうな 栲のく 桐雨

あつたるんて照く 月下

春をあををあ 由る田植を 風洗

指中ばけりしと 干飯 撤下

幼虫の茶の湯延しては 咸宇

赤い菊をり 黄たの菊を 嗅 牧人

上をわいて 吹まある 秋の風 菊歌

ちとむも 菊よつて 白くん 浪鉤

山吹もくくし初をくすれは 毒
あまのつゆのやうな慈をくしと 後を
氣おのころよあはれか見ると 百里
只あまの四十の内は樂城を 氷花
あまのくしとくしあまのくしと 嵐雪
くしとくしとくしとくしとくしと 神叔
佐解のお乃出れ静なる 赤殿
赤殿のちをま切打て送るも 百里
城の近くは旅ころのあまの 神叔

傘のわくちあまのくしとくしと 嵐雪
あまのくしとくしとくしとくしと 氷花
あまのくしとくしとくしとくしと 赤殿
あまのくしとくしとくしとくしと 百里
あまのくしとくしとくしとくしと 神叔
中山道のかたはれとくしとくしと 嵐雪
あまのくしとくしとくしとくしと 百里
あまのくしとくしとくしとくしと 氷花
あまのくしとくしとくしとくしと 神叔

結末

押し常の程のりけむる辰緑子

満座追善各焼香

たのふく人の御ちも四季の孫が百里
尺おさちの程ないつはちろり比氷花

悔前非

みちつちる悲しむ志進を神叔
苦しむ人のまもあま塚の雪 浮生
風のふと一何ふや墓乃月舟竹

るりくくれ妙のまの根の痕し咸宇
付やニなとなふむ舟時由 舟邊
りねきや心をうまある潮既 舟殿
あまゆのりちをふまやま 味と素子

芭蕉のあかきうあつるは徳子
ささくはらり人よまつて侍る
水乃あまへて志はけいハありし
新乃芭蕉のあられ世中安適

十月廿二日無事

好くも多く蕨よこつて逆旅
さあろつてさうりきかひひをて

仲やあよきをまれのわとおこり桃隣

淡くゆけりよ色此日の乳子珊

面平新ゆい小松ゆやと杉風

よごれしるまき川おあし 谷水

名月ハ多餘りくるしり 芳良

とこやう燈ふ所の帷子 序志

ラ

皂莢又梅をゆりも 鴟のそ 太夫

ゆえにハハ古桶う底 亀水

心より今の住をを憎とそ 孤を

とまろしうら景の塩原 子祐

け寒さあられう雪のある曇 利牛

あ綿の重とゆまのせえさ 白足

脊戸結ゆあつてさくもあ 蚊足

折角とれし堀のうら 李三

やあつて平泉とつてあつて月 時坡

文幅せそふ布の爲綿 太洛
 赤白な陰ハ流る岸の如 八葉
 俵のく魚子 燕あつた 桃川
 とろくもあまらむせそふ 利合
 昼みはうりて昔のこゝを根 磯く
 酒乃を干なりく ちり笠 五川 文梁
 舟はあつて 証 証 五毛 湖松
 明なるんをうかふあつた 桐溪
 家のあつたあつた 小利 住 嵐 変

了寧子又桃灯て道うき 石菊
 几なり雪の柳地あつく ちり
 梅のこゝ 苦 齋 ちり 嵐 竹
 白みよ 梓のせりしあつた 此 筋
 あつたあつたあつたあつた 素 龍
 以脚あつたあつたあつた 千 川
 あつたあつたあつたあつた 楚 舟
 流るあつたあつたあつた 角 蕉
 流るあつたあつたあつた 杏 村

紫くし白紫のわのうを年川鷗
凡開ヶををのううを鳥花微笑濁子
香をむすんし 乾うはをより 滄波

吾仙満座普音之吟

うう心ふ保もなりや波を舟杉風
振るや衣も力もなふあじ八葉
光れりも也振舞ふ葉の程はふ子珊

見るあまの影中をうけん房の松 太太
所々々々ぬ詠おや我のきんか 湖松
菊くれく白を惜む居士衣 子詠
山茶をを蝶の粧を極もやん 方詠
う大便 空 結るり 我を 序志
葉のむを白く白く向ん 亀水
ん送りもさうみおくりら 秋の氣 李里
骨肉ありゆるりあり 楚舟
表はく 蒼色を居のちあふ 風弦

悲しむを包みしるる赤松 桃川
 され花並ふもあらんを牡丹 母
 とうけしや中継の苔の下 馬好
 ぬをを思ふくらしのし向が 用陽
 りのみが葉津うりのの枯柳 杏村
 くの骸もくやいふれぬ石人 石人
 むちぬも昔の枯葉の燃きり 芳良
 あつたも繩床さしりぬる新 滄波
 神の由も花あらしぬ 執白が 角蕉

義仲よく送る悼

沙々ん足もあつてして厚川 季吟
 告くすまて死教あしあつた 露沾
 祀あふ糸あつと小春ああはる 山夕
 錫杖よりあつたあつたあつた 直方
 泣くくも目もあつたあつたあつた 翠風
 あああつたあつたあつたあつた 濁子
 あああつたあつたあつたあつた 壺蛙
 何あつたあつたあつたあつた 山蓬

法眼

母はししのらや十余子この家 涼葉
 小庭やあやうきまきしるの凍へ 大舟
 けんの海や十段のたひらき 九板
 澹をみるや社のまりの初歩 此筋
 立ふはこころゆる塚のま 千川
 力州引切しきくはあまゝ 潤泉
 まるま丸 石のん笠のま新 支老
 栝蓐のまやけする壁の系 ト子
 室と菊乃咲あまする 名あま 栝系

表一 ぎふの戸はよりしてある 其井
 こや形 元菫の物蓋五指の松 後勅
 何のうの信りのゆや 栝蓐 蓬山
 五十二子ゆや一島のまろけが 七子
 既院 後まゝも社のまき 鹿谷
 その塚をさそを栝蓐のまのま 龍子
 心ゆきを頼り凍つく 泪のま 馬見
 風の声んや捨あもむきいさう 素就

栝蓐

十月廿九日追善

湖春

亦多々やあはれなる木を掻

一羽はりしよまの朝鳥 素乾

破繩 錦をる日よ辰あふく 露沾

世の音此うけり 下山 浮水

新中みみしつげ 露の壘 枕隣

あき夢のものを川上より 出氷

ゆき物さうき人つらみ 母坂

あふく雨の末を四五町 孤登

この形よねと巻く百合の巻 利牛

竈の虫々しき居りし家 杉風

まゝの力かいつてもさう 死所 素堂

帆をもち舟はるくしき 筆

山陰よもみあつし 竹杖 利合

盆をたすす急なは法 鉢 妙坂

膳所の内行隅もさく思 屋 竺水

二とつてあこしあ 柳 柳隣

むみ柴老いすうし 押 杉風

酒をいそぐはくかやうり
 利牛
 ずもえもお下るをの真なる
 孤を
 立くつてさる雨のたね
 益水
 如あの子はさけはるも昔の
 桃隣
 子たの勢のこゝに持園
 利合
 毛この粗借り返す力おこ
 丹坂
 高の義あつた大なるも
 杉風
 物事のつらさうらさるる
 利牛
 財布こゝろく洞るる
 孤を

の餅の上くの時なる配り餅
 出水
 且れり毛れを雁やうのなる
 桃隣
 山くを信はの者みはる
 杉風
 本の毎りよ葉美用
 丹坂
 言の木の並ひしり
 孤を
 小あげをうけてゆるる
 利牛
 ニく伊勢上るり乃物り
 丹坂
 意ののれ中物をあはる
 益水
 袖中今師の好はるもの枝
 桃隣

そと優美ふるよりの夕昏 利合

十月廿二日

晉子亭ありて其好

今くも雪のそを秋の光る

仙化

かつてせありて寐て並入鴨 是吉

あつ日黒く衣衣ハ新純て 介我

林ひのそせる 階乃くろ 柴栗

あふるくく人かあふるの底は人 沾徳
煙つ天かあきくあきせ新あし 秋風
風子あひは後そと猿乃面 介我
日まの色江の土やと世の縁 寺吟
椀笠いつ運を破乃面くそ 湖月
風あふりやそののちやところ 柴栗
秋あつれあふくあつるそあし 暮子
町とあ月根くくあつるそあし 拙々
帰と菊をむくくく菊ふ 圃指

力州とらるるありしり 乾菰 山峰
 果ちまゑるるふらさるる 芭蕉の 寒玉
 十法の神ありしり 此のま 秋色
 まゑらうお菴あしあきさうり 和水
 白の糸やは十日の世のくやま 芝蔴
 さんくいや難はく向て 一雀
 鷲のまてまゑの蜜柑をさ向が 是吉
 ありるるのさ向あむちが 林也
 雪のおもとあむ君のや名付就 李下

了りの柏イナキ控イナキを二や 是 湖月
 昼の前の 穴をりあろく 井敷
 ろの向も世々の隙の目をうけ 揚水
 カもあはく 証 志ある者 松凡
 けくをせやく君く ちかあつ内 由之
 雀の梅を 終る乃あつる 全峯
 日る原をさ本の肩ハ泥の行 沾徳
 ちりしもろり 樹平のち 李下
 合羽あふよるるり 鈴く白墨 井敷

小侍をいふといふみつた 扱
 扇のゆき 扱
 側のところろ白ひらき 仙化
 ちのまゆ 扱
 ちいさな松のついで 扱
 ちの貝の卓もあつて 扱
 日光梳子 扱
 ちのこすつてを忘れ 扱
 ちの糸のおくハ名や 扱

ちのわとえすえ 扱
 ちのよ 扱
 ちのごも 扱
 ちを土戸 扱
 ちのこの所 扱
 ちの生 扱
 ちの月の鳥帽子の 扱
 ちの二 扱
 ちの色 扱

古事

つぎと綱子ささりゆみ 米由之
肩痺のわし流あふよりしりんご 仙化
けいーとあつこ子牛除るを介我
常あえむ連気拍むの花あそ 沾徳
垣せぬ桃をくんの教まひ 湖月

深草のあきれ宗派あ士を讃して
いとよや友風月家旅泊
芭蕉ののちまひまよひん

旅の端つるの宗派の雪の戸素堂

窓乃雪ほつひ景ある拂子介 亀翁
青石乃陰もあそ礼や木津不掻 横儿
後乃野子控あまのの霜乃杖 景桃
又も木窓跡よささりりも相柱 萍水
ちうし船や膝をたかえさく冬糸紗 野城
亦乃弦を掛くせしよ時雨少 孤屋
油火の溜く悔むや冬糸紗 利牛
すうまはく枝も枝さう柳介 疎雨

指尾下

泣き流るるをやとての廻り合 出水
深川よりとわけつてやなるる 石象
月のと記よまこちしやある世界 利谷
美教仲寺よまある七師の像のりした
明外を仰ぐえとてその隠迹の志子
つづく一とひひのあすけともあうぬ
くより子遠星を望みくかふの世の下
よむぬしよあれもやたへるる也
月言るり候の巻や七師 批教

十一月十二日 初月忌

丸山量阿弥亭 興行

嵐雪

泣かぬ中寒菊ひかり耐^{コタ}ふり
向上躰をききのゆわは法 枕隣
洪^ヒ笠のひろるを避く扇をそく 岩翁
車^カよりくるる小敷の置^カナリ 晋子
笈賣^カあるよ告^カるはありふい 亀翁
一傘と志^カぬく大^カみ字 横儿

古筆下

名月より松系の一程ありひ付ケ 尺艸
 おく之安ほほく廣ふ相の糸 松翁
 白粉の残よりくる秋のし義 去来
 大雄よりくるのしるる中 正秀
 毛谷鼓の山よあつるも吹るるふ 曲家
 榎の木のつるれ海をたなをふ 筆
 吹くもい屏風を膝に押さ 徹士
 鼓くも色し大かくりをさ 心主
 のまをさると盆みあふる 暮四

月をさすもてて舟やひん 巨海
 越艇の衣録つくりみや 荷分
 湯あがり乃身れ冷るる 時童
 弓さるのひるるをさるる 風國
 山家のぬ帯氣勢あふる 集加
 獅子の座よりくる心や花の陰 音子
 杖より月あふ我老乃も 重勝
 うらぬ和尔や豊田の浦伝い 進登
 塩辛桶をさるる 徹士

七

七

雨の目ハちよもあまひしづらうし 挑徒
けこハちんぢとあるは目嵐雪
のりおハ音羽の厨乃下ハ垂 横儿
あこしらはちぢりハの茶摘 荷分
うけハの金さうハはも玉極女 去来
上ハ世の聲を祝く適合 尺州
ハの音もいさく扇のきくさる音 かな
おもすみさるハ浮曲乃目 岩翁
うーハある受戒の児乃白素絹 徹士

能くハと使つたあは 晋子
あハ腹の起り物ら長ハの月 集加
檀子ハゆきと新ハの蔓 桃徒
新ハや着坊探のまハあハ 巨海
衣ハ秋の小袖あハるさる 風曲
生りつる齒をゆきハとあハる 晋子
このまハ女非ハあハちも言ハる 尺中
長旅ハ探あハるさるはるさる 鯨言罪
一日 海をわらうと 教 心主

あふらふを知らず見ゆれば 枕隣
あつたるやめり人けり 岩翁
よふたると秀る柱杖と云く 横儿
こころやとせくみぞと鶏既 巨海
牛糸をとりしころ女子あり 尺中
あふけて碑のさむる月乳 進を
おらむとて荷ひありよらしむ 徹士
三 年越すまは坂の揃株 信分
肥肉ふもあはれささき 志のふぶり 集加

梵天寒くくま川水金言四
灯も困を痛くく光るらん 荒る
不思議子娘をちりせり 吉原
白粥のさつるる志りし 思ひ侘 岩翁
ゆるとありともりも短天 子
こつと四と棧燈ほくせの猿北を 野董
焼あつく于に 志本とく 瀬士
そとくは家とくりこけり 昔 凡か
をこののは華を猫とく 集加

149

山景尺中
イケス
故を籟のみをる 山の景 尺中
受とりの字とまの世の額 尻書
青の月脚半もゆるし膳縁心 桃蔭
とことまをしる蚕柑集く 巨海
かゝるの標をくらふ梅もふ 考四
こゝもゆるる尻もゆるく飼猿 岩翁
おのころふ東蠟燭のきく 徹士
おのころのあまふふ十念集加
産るる中色もこゝふ男の子 晋子

やうちりしるる乾夕乃 酒風虫
節要ののちあやめて相子あけ 横儿
憐と可方ふ 施茶合する 尺中
形よりこびるる竹後のく心 桃蔭
鳥のちりあはるる 著 ナトキキ 言四
鬼のよみあはるるこゝと墨月の洞 心圭
うい着るる花をからよあはるる 尻雪
おのころもあまふふやく老ぶふ 考今
うい付る垣のしるる 去来

米りにもろのいそぬる 坂舟 集加
地蔵を建てるの 浮橋 晋子
箏の制れしにふを拵て 岩翁
よきそづきお宿る木松 徹士
天井をけしおるを 尺中
これ刈込の里のま物 荷兮
水の好のぼくくわハッリ 横儿
あはれそいあるるの 版掛 心圭
淡形の竹つる 嵐雪

まろもの着ると母のセマシく 舟童
赤きつる 瘤ハ付属の 枕極ある 岩翁
はあつる 舟を 舟の舟 風如
あやと赤飯くとも 大井 版 集加
おしそあつる 百姓の弓 晋子
日のさし心しある 寝樓を 徹士
は脚の笠を拵て 尺中
何れもそりし 魂をとりあけ 心圭
新大橋の富士もよく 心圭

あつゝや切干に尾張布 荷今
あゝろろ多し 徳の身 質 カタキ 重勝
お志る琴を悲しむ花のあ 枕 棧
物草しくよ 竹の 交り 横儿

此一帖者於落揃舎書校合変

寺町二条上町 井つら 重勝判

追加

於義仲寺六七日

惟然

花多にせうれそにみ、もま
葉乃紙此をねにまほし
隅くは火新のやせとくまき
四月廿二日とまきと信と
月、朝子綿抱へらむ、持くろ 昌房

かいらにうきく 様ふゆの音 游刀
草狩りまこときりしと取えく 文州
片巻乃觸にそのむ代判 純筆
角錐を今にのさぬ家中凡 胡故
なかり細よ ぬ乃 名 物 直馬
と和ひまうひらしと梅よ 智月
きある証と乃と瘦とくなく 惟純
恵ん佛さすかへし 結乃 孫正考
前よ 尚よ 鹿兜 當此月 臥る

彩香に陰の奥此かき名蓋わけく 昌房
い余と情おしとくく 身 游刀
とらうと花よ夕日の入とぬし 文州
片巻の 様よ 心よ 胡故
蘇ぢよ 隣つれ立けく乃 風 直馬
芝居を鼓乃 梅子 ぬけく 貞光
むつしとさふととに 櫛を 櫛芝
地えわん先くとしと 微房
婿うに 波なるとく 家 川 支

あな乃髪ふをとけく雲丈艸
照月と満老名乃侍多き也乙列
秋此小年にかしる深き曲翠
うれしき階子の下乃より西
砂舟の箱を双云此より獲葉
お合の終を打る道と新北を
茶籠よとるふ乃卯の花
立分るぬ陰あまのこ此中ひ胡故
さのあ若るをこ味線よけ怪物

いよわ乃あつたに多き門徒
あしきぬうらまはなく座多
こつよりとあま仕也一
心くしあくく芝乃うけり
昌房

この仙満座訃音く吟
肩うらし手らるる泣き
此悔や脛乃孫切く
乃乃
荊口

仙満座

昌房

冬此際存し
まを牡丹梅小原家
かけを以て
燭尚く園子
女ありを
あたり
如風
簾ひし
一本の
龍巻
しを
藤系
跡者
あり
土乃
墓と
んれ
や
あ
ん
ら
胡
凡
草鞋の
泣なら
しや
勢田の
真
古
也
冬より
始より
う
ら
う
ら
う
と
よ
朱
地
み
あ
け
く
張る
屋
や
人
名
遠
里
末
位
入
く
か
減
の
遠
小
ま
ま
さ
く
水
野
徑

高麗い
の
と
な
ま
こ
乃
と
あ
と
ま
蘆
葉
道の
ま
此
枝
ま
く
甲
也
ま
な
も
洞
が
支
出
清
る
手
に
伴
え
し
ま
墓
乃
ま
お
竹
官
本
ま
く
し
子
候
り
し
ま
ま
さ
ま
ま
む
け
外
福
道
如
石
と
な
ま
く
位
ま
り
と
乾
の
音
尼
教
徒
十
方
ま
ま
洞
や
枯
ま
く
柳
ま
り
柯
山
月
代
と
ま
く
て
し
ま
ま
一
塚
の
ま
及
肩
し
乾
ま
ま
ま
ま
ま
ま
ま
頭
陀
袋
鳴
枝

卷

末

六月十六日芭蕉翁三十九日

於美奈仲寺無行

墓とく運乃香を披つ求うに 桃類
あゝあゝいあくる 乃葉のそ 智月
臨んよ子孫よ生る 臨れ結つとく 正秀
也白目より眺く

寺町 二条と下
井筒屋庄兵衛叔



